

【史料紹介】日韓基本条約締結をめぐる外交官たちの座談会：椎名家文書からの新史料

麻田，雅文
岩手大学人文社会科学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/4797817>

出版情報：韓国研究センター年報. 22, pp.167-187, 2022-03-25. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

【史料紹介】日韓基本条約締結をめぐる外交官たちの座談会 —椎名家文書からの新史料

麻田雅文*

要旨

1965年の日韓基本条約に調印した外相、椎名悦三郎の顕彰のため、当時の日本側外交官が、「椎名外交」を振り返った座談会の記録である。条約締結の裏話の中で、椎名の果たした役割が中心に論じられた新史料である。

解説

2017年5月29日、史料収集のため、筆者は奥州市の後藤新平記念館を訪問した。この際、椎名悦三郎の史料について、後藤新平記念館の中村淑子学芸員に問い合わせたところ、彼の選挙事務所に残された史料についてご教示頂いた。

それから奥州市の高橋和孝学芸員の案内で、国文学研究資料館の加藤聖文先生と、2017年8月22日に、選挙事務所に立ち入り調査を行った。選挙事務所は同年12月に解体された。選挙事務所とともに廃棄される予定だった史料群は、この調査を通じて保管が決まった。

本史料群については、奥州市の協力のもと、2018年から伏見岳人先生、井上正也先生などと鋭意整理中である。近々、全貌を公開できる日が来ることを願っている。

今回紹介する史料、「日韓基本条約を回顧して」は選挙事務所から回収された文書の一部で、2019年に高橋和孝学芸員が発見した。以下、史料の来歴をまとめておく。

1965年6月22日、日本と大韓民国〔以下、韓国と略記〕の両政府は、日韓基本条約に調印した。当時の外相は椎名悦三郎である。1979年に彼が没してから、3年後に伝記が公刊され、交渉の舞台裏が明らかにされた。この伝記編纂に先立ち、当時の関係者からも聞き取りが行われ、その記録が『記録 椎名悦三郎』¹⁾の下巻で一部引用されている。韓国側では、当時、外務部長官として椎名のカウンターパートナーだった、李東元²⁾が取材を受けた。

日本でも聞き取りがなされ、当時、外務省で椎名を支えた後宮虎郎³⁾、前田利一⁴⁾、柳谷謙介⁵⁾による座談会も開かれた。座談会の司会は、藤田義郎と岩

1) 『記録 椎名悦三郎』上下巻、椎名悦三郎追悼録刊行会、1982年。

2) 朴正熙大統領に見込まれ、1962年、国際政治学者から大統領府秘書室長に起用された。1964年に、37歳という最年少で外務部長官に就任。

3) 1965年の椎名訪韓当時はアジア局長。駐韓大使を1972年から1975年まで務めた。在任中に金大中氏拉致事件、朴正熙大統領の妻の狙撃事件が起き、処理に奔走した。

4) 外務省アジア局北東アジア課長を経て、1965年の日韓基本条約調印を受けて開設された、在ソウル日本政府在外事務所長に就任。同条約発効に伴い、同年12月に初代駐韓臨時時代理大使。1981年から1984年まで、駐韓大使を務めた。

5) 1959年10月から1964年12月まで、北東アジア課首席事務官として日韓会談に加わった。1985年に外務事務次官に就任。

* 岩手大学人文社会科学部准教授

瀬繁である。両名はともに『産経新聞』の記者出身で、藤田は『記録 椎名悦三郎』の著者、岩瀬は椎名悦三郎の秘書を務めた。ただ残念ながら、座談会の開催日時や場所は不明である。出席者も全て物故している。

この座談会の発言で、『記録 椎名悦三郎』に掲載されたのはごく一部だ。また、伝記に掲載されるに当たり、発言には加筆修正が加えられた。このことが明らかになったのは、前述した経緯で、座談会の発言録の原文が発見されたためだ。

この原文は180字詰め原稿用紙に鉛筆書きで記されている。比較的読みやすい文字からすると、当日の速記ではなく、取材時の録音の書き起こしだろう。ただし、録音は見つかっていない。

この原文に、赤字と青字で加筆修正が施されている。『記録 椎名悦三郎』に掲載されているのは、この加筆修正が施された文章である。今回は、明らかな誤字脱字を除き、鉛筆書きの原文を優先して翻刻した。そのため一部は意味が取りづらく、文と文のつながりに欠ける部分もある。漢字であるべき文字も、一部はひらがなになっている。そうした点も、翻刻ではそのままとした。

同じく原文を尊重し、「言う」と「いう」など、本文中に表記のゆれがあるものも、そのままにしてある。「点」が「矣」となっているなど、旧字体や異字体もそのままとした。ただし、本誌の様式に合わせて、漢数字はアラビア数字に直した。なお、引用文中の（ ）は原文に付されたもので、[]は本論の筆者（麻田）による補足である。日本の著名

な政治家は、註での略歴の紹介を省いた。

『記録 椎名悦三郎』の引用と比較すると、原文には多くの情報が盛り込まれている。具体的には、条約調印に奔走した、日韓の政治家や官僚の名前である。彼らの名前が『記録 椎名悦三郎』で採録されなかったのは、椎名の影が薄まるからだだろう。他にも、竹島問題は『記録 椎名悦三郎』で省かれた。そうした機微に触れる事柄について、当時の交渉担当者が回想しているのは、本稿の注目すべき点である。

ちなみに、日韓基本条約調印の直後に『岩手日報』が敢行した取材によると、竹島については、「最後の外相会談でやったことだが——ボクだってこの結果に満足していない」と椎名は答えている⁶⁾。それでも、椎名は条約の締結を優先した。この取材で、「非常に譲歩したという声もあるが」と尋ねられ、「譲歩」というが両方が譲り合わなければ解決にならない。[中略] 条約だって一つの妥協なんだ」と述べている⁷⁾。

日韓交渉における日本の政治家の評価で言えば、椎名は池田勇人、佐藤栄作、大平正芳の後塵を拝している。しかし、紹介する史料からも明らかのように、椎名の果たした役割は決して小さなものではなかった⁸⁾。本史料が日韓交渉のみならず、椎名悦三郎の今後の研究の糧となれば幸いである。

なお本稿の掲載にあたり、永島広紀先生、井上正也先生、金恩貞先生には、掲載誌の紹介や原稿の下読みで大変御尽力頂いた。記して感謝する。

6) 『岩手日報』1965年6月24日付朝刊。

7) 同上。

8) 椎名の役割について、最近の研究だと、以下は例外的に高い評価を与えている。「第7次日韓会談は交渉妥結が既成事実となって開始されたとはいえ、椎名の訪韓と謝罪発言、そして基本条約交渉における彼の決断は評価すべきである」。金恩貞『日韓国交正常化交渉の政治史』千倉書房、2018年、335頁。

【史料】

日韓基本条約を回顧して

出席者

後宮虎郎

前田利一

柳谷謙介

後宮 日韓基本条約当時のことは若いところでは前田大使とか、現実にはアメリカとの問題にタッチしてこられたのは伊関（佑二郎）⁹⁾さんでしょうね [。]

前田 そうですね。

後宮 ことに請求権の金額を決める最後のときは、ソウルにおけるアメリカ大使と韓国政府との間で話し合いがあって、その結果を駐韓アメリカ大使が、東京のアメリカ大使館に言ってくる。そうするとアメリカ大使館が伊関アジア局長の所へ来て報告するというルートだったと思う。

前田 ただ伊関大使のお話の記録を改めて読みなおしてみたのですが、その裏は当然のことながら、ふれておられないですね。アメリカの斡旋というのを。

後宮 私はさっきいったように、アジア局長になって帰ってきたのが1962年で、伊関さんの後を継いで入ってきたので、その時までには請求権関係の大ワクの話し合いは大体出来ていました。日韓交渉には私は大きなヤマ場が3つあったと思っています。一つは請求権の数字の大ワクが決まったこと、池田〔勇人〕内閣、大平〔正芳〕外相のときで大平外相と金鍾泌¹⁰⁾中央情報部長との会談です。

次は日本側が一番重負をおいていた漁業問題で、赤城〔宗徳〕、鉦会談¹¹⁾、12海里。領海3海里の外にそれを認める。今はもう常識になって200海里までいっていますが、あの頃は12海里というたいした

ことで、これを日本側がのむことによって、ともかく李承晩ライン撤廃の話し合いの基礎が出来た。

その次の大きなものは椎名訪韓による「基本条約のイニシャル〔仮調印。外交交渉で、条約内容が確定した場合に合意のしるしとして行われる、代表者の頭文字だけの署名〕」——とこの3つではないかと思います。特に最後の椎名訪韓で基本条約にイニシャルが出来たということが、日韓交渉は「10年交渉」だ、「20年交渉」だと……要するに国内ゼスチャー向きで話合っただけいいんだというようなムードから、「これはやれば出来るかもしれない」という自信を日韓双方に与えたのが、椎名訪韓だと、そんな気がするんです。

前田 まさにそのご指摘の通りだと思いますね。

岩瀬 前尾繁三郎先生の文章にも出ていますが、張基栄（後の副総理）さんが漁業問題で大きな役割をしていたということ……。

藤田 張基栄さんと交渉したのが鈴木善幸さんだよ。裏で……¹²⁾。

後宮 私もどの程度やられたか解らないですけども、いよいよ最後の段階になって漁業区域の線を引く時に済州島の近所の線をどう引くかというような問題になった時、鈴木ラインという名前で、政府が正式にやっている交渉とは別のラインがサジェストされたことが当時の新聞にちょっと出た。それからもう一つ、漁業交渉で裏で動いたのは宇野宗佑さんが河野一郎さんの指示をうけて……。

これは宇野さんが非常に手強い方で、独自に動くというよりか、農林省とも密接な連絡のもとに動いた。農林省の別動隊というような感じだったね。だからむしろ韓国側に対して柔かいといわれた河野ラインの宇野さんでもこの線しか出ないのか——ということでもむしろ事務当局の交渉をバックして下さった形

9) 法務省入国管理局長、外務省移住局長、アジア局長を経て、1962年に駐オランダ大使、1966年に駐インド大使など歴任。

10) 朴正熙大統領とともに、日韓国交正常化を推進した。1962年秋に訪日し、大平正芳外相と会談。国交正常化後の日本の経済支援について「無償支援3億ドル、有償支援2億ドル」などとした「大平・金メモ」に合意した。

11) 赤城農相と元容奭農林部長官会談の一連の会談を指すと思われる。

12) 欄外に以下の書き込みあり。「張基栄氏は韓国日報社長で、輪転機を買うためという名目で来日し、数か月間にわたって、ソウル——東京間を往復しながら、自民党副幹事長だった鈴木善幸氏と李ライン問題を話合った。鈴木さんは池田総理の密命でやっていた——と清宮竜君が書いていた」。張基栄は朝興銀行副総裁を経て『韓国日報』を創刊し、社主となる。1964年から67年まで副総理兼経済企画庁長官。

になったように理解しているんです。

前田 椎名先生も、数年してから思い出しているいろんな話をしておられる中で、今の「いろんな筋から」の話があったということ話をされて、後宮さんのいわれたように、そんなのいちいち聞いておったら誤まるからとにかくお前達事務方がきちっとやってくれ……と。

しかし河野さんの命をうけて宇野さんがやられた、あれは実によくやってくれたなあということで、椎名先生ご自身が評価しておられましたね。

後宮 私の感じていることは、全般的な評価になるのだけれど、よく新聞や雑誌に地下鉄問題とかいろんな利権がからんだような話が出ていますね。しかし、あの国交正常化交渉に関する限り、利権のからんだにおいなどは全然、私の3年間にはなかったですね。感じなかったね。というのは、いいことにはですね、日韓交渉なんて一体いつ出きるかわからんという空気でした。だからここで韓国にいい口を聞いてやって、それで利権がつくんだというようなことは思いもよらなかったからね。

前田 そういう現実性はなかったですね。まあ、私もいいだしたむしろ一番最初ぐらいなのですが、韓国が36年間にわたって日本の隷属下にあったわけですね。ですから日韓交渉というのは、36年もかかって悪くなった関係で反日感情が累積されてきた関係ですから、その反日感情が収まって、韓国も日本と手を組んでやっていかにやらんと感ずるようになるには36年位かかるだろうと——これ酒でも少々入ったりした時なんか、よく局長にも申し上げたりしとったですよ。そんなに、おいそれとはまとまりませんですよ。

一番親韓派とみられていた私などでもそういうことを言っていたんですよ。

後宮 そうそう。

前田 そういう時に、ダーッとその空気をかえてしまわれたのが椎名訪韓なんですな。特に椎名大臣が韓国についた最初の声明で「深く反省する」といわれましてね。それでガタガタと動き始めて、基本条約のイニシャルになって……ね。これは本当にやれば、やれるかもしれないという現実的な空

気になってきたのは、その時なんですよ。

後宮 これはもう——その時現地に前田大使がいて一番その裏の根回しをよくやってもらったんです。

前田 私はアジア局の調査官か何かという資格で出張しまして……[実際は、1964年12月25日付で官房調査官]。

藤田 椎名さんの「過去を深く反省する」という表現は椎名大臣が後宮さんと相談してステートメントにつけ加えたということになっていますが……。

後宮 そもそも少しさかのぼってお話ししますね。韓国側は初め吉田茂元総理に来てくれと言う意向が非常につよかったんです。というのは、「周鴻慶事件」¹³⁾が台湾との間に起ったでしょう……。

藤田 そうそう、大問題になりましたね。池田内閣で……。

後宮 吉田さんが台湾に行かれて、蒋介石総統との間ですっかりスムーズに解決された。あれを韓国側が見ていて、吉田さんのような大物に韓国に来てもらって、今のお話のように36年間日本は悪かったというようなことを一言、いってもらえば日韓交渉全体のムードが良くなるだろうからという動きがあったんです……。で韓国側もいっていたしあの時アメリカの駐韓大使……。

前田 ブラウン¹⁴⁾ですね。

後宮 ブラウンもそういう案だったんですよ。ところが吉田さんもああいう方で謝まりに行くなんぞということでは問題にならない、こちらとしては小坂善太郎さんが外務大臣の時、「小坂訪韓」でいかけたことがある。外務大臣の訪韓なら先例があるから、椎名訪韓位なら手をうってでもいいということを先方に言った。そうしたら、そんなら椎名大臣に来ていただきたいと……。

しかしね、日本としても「陳謝使節」で36年間悪かつ

13) 1963年10月7日、訪日中の中国代表団の通訳、周鴻慶が、帰国直前に駐日ソ連大使館へ保護を求めた。ソ連大使館から日本側に引き渡されたあと、1964年1月12日に帰国した。台湾側は「亡命希望者を帰国させるのか」と不満を残した。

14) ウィンスロップ・ブラウン (Winthrop Gilman Brown)。1964年7月から1967年6月まで、駐韓米国大使。

たと謝まるとなるとそんなことは国民感情の上で言えない。今とはだいぶ感じがちがいますからね。そこで（陳謝など）そういうことは一切なしと伝えたら韓国側もそういうことは一切いわなくてもいいということだったんです。

前田 金東祚¹⁵⁾ 駐日大使でしたね。

後宮 ……ですから例のランディングステートメントの原案は、その36年間の問題に、いく分かイロをつけようというので、「日韓間には過去において遺憾ながら不幸な時期もありましたが……」という一節を入れたんです。そしてそれをあらかじめ、椎名訪韓はこういうライディングステートメントにするぞ——とソウルに先発していた前田君へ電報打ったわけですね、そしたら前田君から意見具申の電報が来てですね、「こんなことでは今の韓国の空気は、とても落ちつかない」というし、金東祚大使も「何でもいから、もう少し、もうちょっと強い遺憾の意を表明してくれ」って言うてくる。しかしこちらはそんなの約束違う。吉田訪台とは話が違うんだと強引に原案で押しとおして、アドバンスコピーをアジア局長の出発の前夜の記者会見で配ったんです。

【不明】 なるほど [。]

【後宮】 そしたら霞ヶ関クラブの皆さんが乗り込んできて、「こんなもんだと逆効果だ」。云わないなら一言もいわない。言うんならもっとハッキリ悪かったという線を出すべきだと、つめよってくる。一方ソウルの前田君からも「ぜひ、もっと何とかしてくれ」と非常に切々たる電報が2度でしたかな、来るんです。私も新聞記者の人までが、これでは不充分だというのなら、本当に役人的発想を考え直さなくちゃいかんだろうと思ひましてね。そこで「遺憾ながら」という文句を「不幸な時期があったことを遺憾とするものであり」という風に、さらにもう1つプラスアルファをつけて「深く反省するものがあります」という文句を入れたんです。

岩瀬 ああ、そこで入れたんですか……。

後宮 椎名大臣はその時、まだ出発前夜でいろんな打合せがあつて残っておられました。もう暗くなつていましたがね。私は大臣室に行って「、」もうどうしてもこういう状況ですからと申上げた。そしたら大臣はぜんぜんこだわらずに淡々と、「ウン。そんならそれでいこう」っていわれた。それですぐ前田君に電報を打ったんです。そしてその通り椎名大臣はランディングステートメントを言われたんですよ。ところがこれがもう意外な効果がありましてねえ。ソウルに着いてすぐアメリカ駐韓大使などが斡旋してくれていたから、大使のところに訪問に行ったら、向こうがへき頭「これはいいランディングステートメントだった」と誉めてくれるし、李東元外務大臣の所へ行ったら「本当にこれは良かった」というんですよ。ムードがガラッといっぺんに変わりました。変なものですね。一言で変わるもんなんですな。

前田 まったく、そのとおりでしたなあ……。驚きましたよ。

後宮 これは後日談ですが、あの頃韓国外交部のアジア局長をしていた金清載さん、今オランダ大使をしています、その人に「日韓交渉の決め手になったのは椎名訪韓だったですね」と私がいったら「いやあそう椎名訪韓と一般的に焦点をぼやかした言い方ではいけない」と、「あの「反省する」一語です」って言ったですよ。この韓国の人に対するエモーションナルというかセンチメンタルなあの一言が非常に大きな要素をなしたんだなあと感じましたね。

前田 いや、非常に僭越ながらね、「遺憾とする」だけならこれじゃ、おいでにならん方がいい、逆効果だと、申上げたんです。どういうことが起こるかもわからん空気でしたからね。

後宮 こっちは金東祚大使にだまされた、あやまらなくていいと言ったのに……。

前田 ……局長はそうって怒られるしね。私の方は現地の空気がソウルにいるだけにね、そのために私ども何人かソウルにいたわけですから……。

後宮 あの時、ソウルには、あんたと……。

前田 三谷〔静夫〕¹⁶⁾ 君とが……。ぼくは

15) 1965年の日韓基本条約の締結に向けた交渉で10年以上韓国側首席代表を務めた。1973年から1975年まで外相。

殆んど徹夜でしたよ。椎名大臣の来られる前日は……大臣は翌日おいでになり、それをお読みになられる、私は横で通訳をせにゃいかんわけですから。全体の文章はアドバンスコピーで電報でもらっていたから、韓国語になおしておいたわけですが、その深く反省する部分はその晩に来たんでね。しかしこれこそ待ちに待っていた部分 came たんだから、徹夜なんか平気だぞさあ、っていうわけだよね……(笑い)。

後宮 飛行機のなかでキミが、「あれは良かったです」って言っていたと聞いたよ。

前田 いやあ大変、うれしくてね、それでそれを韓国語になおして、諸般の準備をもう一回おさらいしてみてね。もうホテルで、皆、2時でも3時でも平気で仕事しとったんですよ。今でも覚えていますけどね。大臣のみえたのは2月17日。その日とっても寒かったんですよ。とにかく寒かった。冷下^マ17、8度。

後宮 そんなだったかなあ。

前田 ええ、寒い所でそれこそ椎名さんね、こっちからそれも電報打っておいたわけですよ。オーバーコートをお召しになっておいで下さい——。それでもこうふるえ気味でね。それで私は横にこう立ってね、大臣が着かれるなり誰だか、「こことこことこで段落きして下さい」って言って、赤エンピツで印をつけて……。それで椎名大臣が「深く反省するものであります」とこう言われた。それをこちらでも受けてね、今度は韓国語でやったわけですよ。それがたしかナマの中継放送されとったんじゃないかな。何かね、とにかく韓国はみなもう注目しとったわけですよ。いま後宮大使がいわれたように、その足で大臣は李東元長官の所に表敬に行かれたわけですよ。そしたらもう「いい到着声明を出して頂いた」っていうことなんですよ。それからその晩がた李東元外務大臣だったかのパーティーがあって、そこへアメリカ大使、ドイツ大使、その他皆、集って……。

後宮 アメリカ大使の所へは、独立訪問したんだよ。

前田 その席上でも「深く反省」は良かったとみんな

なからいわれて……。本当にうれしかったです。

後宮 いや、いままで大臣にブリーフ〔説明〕してあったのを瞬間に変えると申上げても、淡々として「ウンそんならそれでいこう」といって下さったのはありがたかったなあ。それからちょっとしたエピソードでね。そのランディングステートメントやった後、日本の国歌君が代を演奏することになっていたんです。これは画期的なことでもこれだけでも大臣に来てもらった甲斐があると思ってたらね、最後の瞬間に君が代やめて、アリラン行進曲に変えた。

前田 それはそこまでまだ国民感情が熟していなかった。こういうことですよ。

岩瀬 たしか尹潁善¹⁷⁾元大統領もパーティにやってきましたね。

前田 そう、それをつけ足そうと思ってたんです。パーティには韓国の新聞記者も取材に沢山やってきておる、それで韓国の新聞記者がみな、椎名大臣のところへ集ってきてね。「椎名大臣あなたは、あそこへ来ている尹潁善さんとそっくりだ」っていうんです。非常にもう風ぼうが似とるんだな。そう言われてみると——。彼もなにか、こう東洋の君子みたいな顔しとられるわけ(笑い)、「なるほどそういえばそうですね」とほくなんか通訳を兼ねて立ってたから、「尹潁善さんというのはあの方ですよ」と大臣に教えてあげた。ところが大臣の受け答えがまたうまいんだなあ、「いやいや尹潁善さんは韓国民の大指導者だ、年からしても私よりも二つも上で、あの方は私の兄さんですよ」と……。

後宮 なるほどね。韓国の人ってというのはそういう言葉が一番こたえるんだ、兄さんとか弟というのが。

前田 2年前かな——。ある長老が韓国に来て……。

藤田 大野伴睦さんだ。

前田 その方が韓国にこられた時、「俺は韓国と因縁が深いんだ。朴大統領とは親しくしとる」と、ま

16) 当時は外務省調査官。後に駐韓日本大使館参事官。

17) 韓国の政治家。韓国独立後初のソウル市長などを経て、1960年、李承晩大統領失脚後、国会議員による間接選挙で第4代大統領に就任。張勉首相側との対立から政権は安定せず、1961年、朴正熙らのクーデターを招く。

あそれを強調されたい余り、「オレは朴さんと親子の関係を結んだ」というような発言をされたんです。そしたらね、韓国の特に需教的な受け取り方からすると、子供は親父さんの前で眼鏡もかけてはいけない、タバコはすえない、酒はこう横をむいてのまなければいけない、なんていうようなのにね。なんだと——。「親子の関係」だといったら、オレんとこの大統領は子供か、怪しからんじゃないかといってね、「親子の関係」発言はえらい反発をかい評判悪かった（笑い）。ところが椎名さんは、尹潽善さんを「兄さん」ですからね（笑い）。さあそれがまた翌日の新聞のカコミなんかにはワァーッと出るわけです。尹潽善さんを兄さんだと言った、椎名さんは大政治家だと、到着声明はこんなに大きく出るしもう数日間にわたって椎名さんの評判で持ち切りだった。

後宮 当時の新聞、残ってるだろうね。

前田 ——と思いますよ。それはもうとにかく、飛行場から市内に入られる間に、空気が変わったんだから……。大げさにいえば——。

後宮 そうかもしれない。というのはね、漢江の大きな鉄橋の所で、「椎名帰れ」って日本語で書いたプラカード持って、2、3人ぶらぶらと出てきたよ。それから朝鮮ホテルへ入る時にあのカーブでスローダウンした時に、デモ隊が沢山いておばあちゃんのような人が出てきて、腐ったキャベツを投げつけたですよ。大臣と一緒に乗っていた向こうの外務部の連中がヒヤァーとしたと、後で言ってたけど。ヒヤァーとしたのか芝居をやらしたのか解からんなあと思ったんだけど（笑い）、ところがね、いよいよ基本条約のイニシアル済まして、帰る時は、控え目ながら沿道で椎名さんに手を振っているのがいるんですよ。

柳谷 そうですね。

後宮 そんなにいっぱいの人ではないですけど、やっぱりところどころで振っているのがいるんだ。だから国際関係って、何か人の気持ちというのはカラッと何かのあれで変わるようですね。

藤田 基本条約の文案は、日本の外務省は、日本独自で案を作り、韓国は韓国での案をつくるという形

だったのか。どういうことだったんでしょう。

後宮 これは、前田大使の方が詳しいと思います。私がアジア局長になった頃は、基本条約の文案は、八分どおり出来ていたんですよ。

前田 どちらが作ったということではなくて、あの基本条約のサブコミッティというのがありまして、日本側は広瀬君¹⁸⁾（現在輸銀監事）韓国側は金清戴さんだったかなあ。

後宮 李清戴¹⁹⁾ さんだ。

前田 これはね、不思議なんですけど英語で出来とったみたいで。他の案は日本語で、やっているんだけど、あれだけは、交渉は日本語でやってるんだけど、テキストは英語だったかな、ですからどちらも各々原案的なもの持っていたらうけど、その基本条約小委員会というところで、両方で交渉しながら練りあげていったんですね。椎名大臣が韓国へ行かれる前には2案を残して全部、形は出きていたんです。その2案のうち1案は日韓併合前の条約を全て無効だという、表現にしてくれという韓国側と、論理的には1度、条約を結んだんだから、終戦後なくなったというのならわかるが初めからなかったというのは、法理上からも問題にならないというこちらの主張ですね。

後宮 こちらとしては韓国側の意図を疑って、もし、初めから無効だったとしたら、併合条約に基づいて行なった日本のいろんなことはすべて違法だったということになる。そうして請求権のうわ寄せでもしてくるかというそういう猜疑心が、こちらにあったわけですね。だからその表現が1案と、それからもう一つは韓国政府の主権、管轄権の及ぶ範囲が38度線以南だけなのか、それとも建て前として半島全部に及ぶとするか、ちょうど、日本と台湾との日華平和条約がそうですね。

たてまえとしては全中国の代表となっているが、現実論としては台湾政府の統治権の及ぶ範囲にする——というああいう表現にして欲しかったんで

18) 広瀬達夫。1964年11月の第7次日韓全面会談当時、アジア局参事官。のち駐トルコ大使。

19) 広瀬のカウンターパートナーだった、李圭星駐日代表部参事官を指すと思われる。

しょう。

藤田 なるほど……。

後宮 ところが日本側は野党の主張もあって、もし韓国政府が朝鮮半島全域の主権を代表するっていうんでは、あとあと北朝鮮との国交正常化交渉でもおこる時に大きな問題になるということで、「国連の決議」が実行範囲は「南」だけに及ぶというニュアンスを出した表現をしています。あれに基づいた表現にしようという、その2桌に相違点をしぼって持っていったんです。政権の訓令は出来れば基本条約にイニシャルは出してくるという方針になっていたが、しかし、ほくは出来ない公算が7、80%とっていたですね。出来るとは全然思わなかった。

藤田 柳谷さんは、当時は本省でしたか？

柳谷 いやロンドンに行っていました。その時（椎名訪韓時）はいなかったんです。ですから……その部分は、余り詳しくないんです。

後宮 日韓条約は出来そうだとということになったんでロンドンの柳谷君にまた無理をたのんだんです。

柳谷 私は5年3ヶ月程北東アジア課におりました。李承晩ライン時代からずっと——。状況はフォローしていました。朴大統領の政権になって日韓会談が断続的にありました間、ずっと前田〔利一〕課長の補佐をしていたんですが、5年以上になったものでロンドン大使館に基本条約の年の〔昭和〕41年1月に赴任したわけです……。でロンドンで仕事してたらですね。その今の基本条約のイニシャルが終って、いよいよ日韓会談、最後の段階に来そうだとしたもので、東京から電報がありましてね。

後宮 あの時は柳谷君を帰すより他ないという気がしてきたんだ。

柳谷 普通、外務省のルールでは次の任地へ行けば、その仕事が任務であるから、前にやった仕事をまたやるということはむしろないですよ。それが、「一時帰朝して日韓会談に参加せよ」という本省からの指示が来ましてね。そういう時は現地の大使は、そんなことやると困るといつて断ることが多いんですが、幸いなことに島重信〔駐英〕大使が、事情をよくご存知だったものですから、二つ返事で、「そういうことなら、一時帰しましょう」といつて下さっ

て、3月でしたかね、帰って参りまして6月の末の調印まで4ヶ月アジア局付みたいになって、お手伝いしたわけです。

前田 訪韓時の記録、読まれたと思いますが2月17日から20日までですからね椎名訪韓は……。途中になったんですけども、イニシャルする前の晩にわれわれバカだから大いに宴会で飲んだんですよ。その最中に、後宮大使と椎名大臣とが別室で向こうの李東元外務部長官を相手にやっとなるわけですよ。大臣はね、「とにかくオレの見るところ、この2桌にしぼられとる」と〔。〕さっき後宮大使のいわれた2桌ですね——。

「この2桌は、オレが今晚から明日にかけて日本側は全部収める。だからキミの方がここで、OKといえ、オレはもう明日帰るんだからサインして、イニシャルして帰れる。キミ一人のあれにかかっているんだ」と李東元さんをいわば、椎名大臣はおどかして決断を求められたわけです。ほくはそばにいなかったからわからんけど、後宮大使はご存知なんです。しかし、困ったことに朴大統領は鎮海に旅行してソウルにいない。國務総理の丁一権²⁰⁾氏は、ソウルに残っていたが、とにかく大統領のOKをとらんと李長官、何も言えんわけですからね、李長官は「困る困る」と言う。椎名大臣は「これがもうここで決まるといのに、大統領がもう寝ているとか、遠くに行っるとか——そんなことですむのか」って迫られたらしいですな、大臣が。オンドルの上にご座ってね、そうしたらもう李東元さんも、参っちゃってね。「大統領はいま軍艦の中だ」という。そしたら椎名さん「軍艦なら無線電話があるだろう。連絡つくじゃないか」。

そこで李長官は鎮海の軍艦に電話したらしいんですよ。「椎名さんとも話し合って、この二桌にしぼられた。これをいうようにしたら、椎名氏は日本側をまとめて明日仮調印して帰られると言っとなるが……。」と大統領に伺いを立てた。

「いいだろう」と大統領は決断したらしい。そこで

20) 1957年統合参謀本部総長を最後に予備役編入となった。1959年駐仏大使、1960年駐米大使などを経て、1963年外相、1964年から1970年に首相をつとめた。

李長官は「朴正熙大統領がよろしいです」とこうなった。そこで椎名さんの、もうそこでの実にその時のご指示がお見事というかね……………。

ホテルに帰られた大臣はすぐ「おい、黄田 [多喜夫] 君に電話かけろ」黄田次官にね、

「明日あさ、これとこれとこれという順番で、オレが電話をかける。まず、黄田君に閣議だとか、そういったものの要旨を今から指示するからお前、電話しろ」と私に言われたわけです。

藤田 そのころ、日本と韓国の電話事情はわかったんでしょう？

前田 そうなんです。いやそれでね、私はかねてこのことあるは予想して、後宮局長からご指示もあったんですが、当時のソウルの電話局は、能率のわるいことおびただしい。申し込んで1日以上待たされて、かかってきた時は何の用でかけたんだか忘れる位なような調子なんですよね。かかりゃあせん。けどね、こんな大事なことから、どうしてもというんで……………。

さっき申し上げた一緒に本省から電信官が一人来ていまして、電話局とも同じ建物の中に彼はいたんです。だから向うの交換手とはなじみなんです。彼に金を持たしてね。今日はコカコーラを5ダースぐらい、それに洋菓子を50人分か30人分か買って持って行って、主任によく頼めと……………。ご承知の通り椎名大臣がおられる間に必ずや両国にとって非常に大事な緊急の電話電報が出る。電話がかからないようじゃあ、損をするのはあんたの国だしオレの国も損をする。だから、すぐかかるようにきつとやってくれと頼んでおけとってね。それが実はドンピシャり効きました。

椎名大臣がホテルに帰ってこられたのはもう真夜中ですよ。

後宮 電話局はもう閉鎖してるね。

前田 普段ならもう閉鎖しとるですよ、それが、黄田さんの自宅に電話かけたらすぐ出てきたんです。5分位待ったらね。いやもうびっくりするぐらい能率性がいい (笑い)。

そしたら黄田次官くしゃみしながら、^{〃〃}気嫌の悪い声で出てこられるわけです。ほくは「もしもし、黄

田次官ですか」「おうオレだ」「こちらソウルの椎名大臣からですが……………」といたら、もうびっくりしちゃってね、「うん、何だ何だ」。椎名さんは「これこれこうで明日やるから、問題はこの2卓だから……………。これをアレするように、キミは事務的には全部やってくれよ」とこう言われるんですな。そこでもう1回ぼくは国際電話局にダメ押しして「明日何番と何番と何番と何番とにね、何時から何分きざみでこういうように電話をかけてくれ」と、もうくどい位頼んだわけです。翌朝我々もホテルに泊まっていたものですから、その時間になって行ったら、もうピターッとかがってね。ぼくの記憶はちょっとあいまいなんです、一番最初は橋本 [登美三郎] 官房長官、二番目が佐藤総理だったと思うんです。最後は総理にかけたと書いている人もおられるがぼくはそばにいたから一番確実なんだろうと思うけど……………。三番目に、三木 [武夫] 幹事長。

藤田 川島 [正次郎] 副総裁は？

前田 ああ逆かな、副総裁、幹事長でしたかな、とにかくこの4人に対して、後宮大使がいわれた基本条約のポイントをまったく見事に整理して、「旧条約の問題はこの卓、それから管轄権の規定の問題卓はこれとこれ……………。私の見る限り、これはこれでやったらよろしい。向こうもこれでまとめる。この時機を失したら、いつまでたってもまとまりません」といわれ、そして誰でしたかな、その人にはソーッと「ぼくはこの方針でやるから……………。事務的には黄田次官の方からいくからよろしく頼むよ」とこう言われた。

その辺で私が憶えているのは佐藤総理が、「それで国会は大丈夫か」って言ったらしい。そうしたら椎名大臣「いやあ、国会のことなら私が全部責任もつ」。もうそれで「結構です」と佐藤総理がいわれたらしいですね。それでサーッと決まっちゃった。それがまだ暗い朝の5時か6時位にかけてですよ。

後宮 あの時、椎名大臣はステテコみたいな長いパンツはいてベッドにこしかけて電話しとられたな。

前田 その間は椅子にこう坐って待たられるんです。実にお見事でした。外務省では、^{〃〃}急扱会議やりましてね、7時頃ですか。もうそのラインで進

めろという反応が東京から来はじめたですよ。

後宮 環境は、いま、前田大使が話されたとおりになんですが、内容的に反省してみると、その二つ残っていた。——韓国政府の主権の及ぶ範囲の問題と併合前の条約の問題——結局、結果的に見ると、併合前の条約は初めから無効だという書き方をどうするかというところは、日本側が譲って、それから韓国の主権の及ぶ範囲は南半分だけだという書き方を、国連の決議を引用しながらするというやり方の方は、韓国が譲って結局バーゲンにした格好になったような気がしますね。いづれにしてもあそこの段階で基本条約が出来るなんて思ってなかったから、出発前に外務省の上の方には何も通じていないんですよ。次官にさえ通じてないんですよ。これは後で黄田さんが怒ってたけど、日韓交渉っていうのは、そういうふうには10年やっていて、出来るとは思わないものだから、いちいち次官に通じてなかった。だからぼくがアジア局長を伊関さんから引き継いだ時に、「これは上の方はどこまで通じておくんですか」って聞いたら、「いやあ次官なんかいいよ」って言う。それで、1週間、1回位やっていた交渉の経緯なぞ次官までには全然通じてなかったんです。

柳谷 日韓交渉という特殊な、戦後処理の特に朝鮮半島という特殊なことでありそれが10年以上も延びていたという異例づくめの交渉でしたから……。後宮局長のいまのような立場もあり、椎名さんの普通の外交交渉ではないような独特の役割が出てきたと思いますね。そこにまた椎名さんというのは、非常にぴったりの大臣だったんでしょうね。

藤田 李東元さんとインタビューしたときにね。椎名さんが明日帰るという最後の晩の宴会に李東元外相にさそわれて二次会に行った。ところが料亭の1階には制服を着て略章をつけた大将、中將クラスの軍人連中がたむろして、無言の威圧を加えたと……。それを無視して2階に上ったというようなことをいってましたね。

前田 それは韓国側が、李東元外相にあまり下りるなっていう圧力かしら……？

後宮 いや、やれという方向だったろう。

前田 ああそうか。やれという方向ですな。あの時

の軍人のあれは……。

柳谷 それは面白い話ね。

後宮 なんでそのただらしてらんだ。どうして早く日本との交渉をまとめないんだという圧力だ。

藤田 朴大統領がね……。大統領の考えは何が何でも交渉を妥結させたいという意志だった。そこで、軍人の威圧はね、大統領の方から手を回して仕組んだんじゃないかって李東元さんは言ってましたね。

後宮 それで思いおこすのは、やはり朴正熙という人はいろいろ言われているけど、日韓交渉をまとめるということについては、非常なドライビングパワー[推進力]だったんだろうと思うんですがね。

日本に対する基本的な姿勢は尹潽善前大統領とは、違ったと思うのは、サイドストーリーになるんだけど、李方子殿下がおられますね。あれは終戦後ああいうことになっちゃって、経済的にも非常に困った立場に立たれたんだけど、韓国政府は全然面倒見なかった。ところが朴大統領になってから、月いくらかずつでも、生活費が出るようになった。これは方子殿下は非常に感謝して言っておられたことを思い出すんですね。それから李王さんが日本からむこうへ帰られて亡くなられたとき準国葬的な大きな葬式をしてるわね。ああいうところを見ても日本との関係ということについて朴正熙さんは、非常に前向きの姿勢だったと思いますね。そしてぼくは、やはり李東元外相。あの交渉が出来た韓国側の功労者というのはやはり李東元さんですよ。素人のこわさというか、なまじ官僚じゃないあの人は韓国の全学連だったわけですね、延世大学の全学連委員長で、あの素人のこわさが一つ。それから官僚的人柄ということで、あまりぞっとしないところもあるが、金東祚大使——の2人だと思いますね。

岩瀬 金東祚大使はそうですね。

後宮 あの人のドライビングパワーというのは大したものだったし、韓国外務部の青年将校も相当おさえましたね。ねえ、そう思わない。

柳谷 そう思いますね。彼は野心があったかどうかは別として、やはり大きな政治的な決断とか、そのためのいろんな舞台作りとかいう必要は、考えてい

たわけで、もしこれが全く事務的な大使であったならば、事務方の言う通りになって、なかなか……ね。いわゆる事務的な韓国代表という以上まとめるのに自分の役割り果たそうという面は非常にあった。それは有形無形に大きかったと思いますね。

後宮 面白いのは徹夜交渉、ホテルでやったでしょう。後に我々がこうやって控えて議運の様な形で……。議論が白熱して、お互い興奮してくる。韓国側もなかなか折れない、事務当局の連中が……。だよ。そしたらそれを金東祚さん日本語で「お前こんなこと、どうでもいいじゃないか」って怒りつけるんです、芝居じゃなくて本当にね。で韓国の若い連中すっかり怒っちゃって、自分のところの大使が、しかも相手方のいる前で、日本語使って怒られるという。もう大憤慨してるんだね。あれは芝居じゃないんだね。韓国の人にはカーッときたら、もうそういうこと忘れちゃうことあるんですね。だから本当にまとめようという意図は強かったと思うなあ。

藤田 向こうの政治情勢というのが大きく関係していますね。

前田 そうですね。これは椎名さんと離れるかもしれませんが、私のずっとやった印象を言いますとね、やっぱりこれは、日本の36年間の植民地支配。それから終戦後の在日朝鮮人の行動に対する日本人のつよい印象というようなさまざまな、その普通の交渉にない背景があったわけですね。従って日韓交渉の初期の頃の双方の立場というものは、まとめるために、ここまで譲ろうとか、向こうの立場を考えてとかいうのでなくて、韓国から言えば全て日本は悪かったんだと、日本側も飛んでもない、日韓併合は国際法では有効だといわんばかりの態度。そういうところから出発したんです。出発せざるを得なかったんだと思うんです。さまざまな経緯をへているうちに、お互いに理解も深まり、その間、やはり国際政治というものが、韓国独立、あるいは南北分裂という極東アジアにおける国際政治がですね、そういう形でだんだん現実として定着してきましたからね。双方が現実的になっていった。基本的にはそういうために、あの位時間は外交史としてみると必要だっ

たんじゃないかと、私は感じますね。

後宮 外交交渉——、外務当局というのは、つねにまとめたい方にまわっていくものなただけで、この日韓交渉については、少なくとも私がタッチしてから、日本に新しい内閣が出来たりすると、すぐ外交問題の一項目に、日韓交渉の促進というのが入ってくるんですよ。最後の池田内閣の場合も、それが入ってきて、しかも非常に事務当局の尻をたたくような姿勢が見られたんです。どうして池田さんがそんなに日韓交渉、熱心になられたのかわかりません。そこで事務当局で作文して、さっきの前田大使が言われたように、36年の統治で反日感情が残っているのだから。日韓交渉も36年かかる位の難交渉なんだ。早くしようと無理したら、かえって、不利な条件になったりするから慌てるべきじゃない。むしろスローダウンというか、出たとこ勝負というか、流れにまかすような腹がまえで……。というような意見具申をしたことがあります。池田内閣のときに佐藤内閣が出来て、またおおいに促進せいとなってきた時に、金東祚大使が、それに呼応するかの如く、あるいはそれにわをかけたような非常な促進ペースのスケジュールを立てて、いつ椎名さんに来てもらう。それにこたえていつこの李外相が交換訪日する。そして基本条約はどうして……。ともう勝手にスケジュールを立てて、押しまくってきたわけです。

前田 役者がそろった。役者がそろったんだな。

柳谷 今の部分は後宮大使の言われたとうり、そういうことで、10年もすでにやってきたわけですね。交渉一般の原則ですけれども、そこであまりこっかが早くまとめられ、まとめられといひ出せば、結局まとまらないわけですね。向こうはそれだけ日本の譲歩を期待するだけに終わりますからね。やはりまとめる時こそ、表向きは強い姿勢をとらなければならないわけで、内閣がかわったとか、国会の演説なんかで促進、促進と言えば、むしろ向うは日本の足元をみて強く出てきます……。そこで相当毅然とした姿勢をとらなければいかんということがあつたわけですね……。私は池田内閣から佐藤内閣に変わって金大使がきて交渉促進のスケジュール示した、その背後に朴大統領がまとめようと思つてたという

ようなお話、今から考えると、今までのように韓国が、これもあれもと要求をしたんではまともでないっていうことを、韓国側もかなりその時臭で感じてたんだと思います。韓国はあの時臭における、韓国の国際政治の立場からいって、やはりまともでない。国内的には日本からの経済協力が必要だ、という状況もあったからまともでない……。そのためには譲るものは譲ろうという雰囲気は双方にちょうど出てきてたんでしょうね。天の時、地の利、人の和、という言葉がああ時、はやりましたが、天の時はやはりフランスの中共承認とかも起ってきたし、そういう大きな国際政治の流れの中で、韓国として、いつまでも日本といがみあっているのは不利益だという、そういう天の時といいますかね、それから地の利はもちろん前からあること、そこへ人の和といいますか、その中における椎名さんの役割りが、あったんじゃないか——いろんな要素があってそういうの来たんじゃないかという感じがするんです。

後宮 柳谷君に聞いたかったのは、あの交渉でアメリカがどれだけ促進役にまわったのかという問題ね。

藤田 そのところを時間的に追ってみると、1961年池田内閣ですね、11月に軍事革命の成功した朴議長がアメリカへ行く途中に日本に寄りました。その前の10月24日に金鍾泌中央情報部長がやってきて、池田首相、小坂外相、佐藤通産、河野農林、藤山〔愛一郎〕経企の各大臣と会っている。そして朴議長の来日は日本政府の招請の形にしてくれといっていますね。その後、ラスク國務長官²¹⁾が日米貿易経済合同委員会出席のため来日し、池田—ラスク会談があるわけですね。ラスクは韓国へ行って、朴—ラスク会談があるんです。そして問題の対日請求権は朴政権のオ一次経済五ヶ年計画の進行と直接の関係を持つ、従って、早く日本側で決めてくれ、そうしないとアメリカ側の援助が決まらないということを池田さんに催促しているんですね。そして11月12日に朴議長が来日するわけです。池田—朴会談、そしてアメリカでのケネディー—朴会談となりますね。

21) デイーン・ラスク (David Dean Rusk)。1961年から1969年までケネディ、ジョンソン両政権の國務長官を務めた。

柳谷 ありました。ええ。

藤田 だから、相当トップレベルでアメリカのプレッシャーというものか……。

柳谷 そこんところはこういうふうに思いますよ。もちろんアメリカはね、日韓会談妥結を望んでいたことは当然ですね。それはアジアにおける安定ということの……。特に韓国に兵隊をアメリカはおいているわけですから……。従って日韓交渉の促進についてもいろいろ意見もあり、ラスクが来たり、その他いろんなレベルに、いろんな機会に日本側に対し、韓国側に対し、話を聞いたりしたことは事実だと思います。しかしアメリカのある程度の意向というものが日韓双方の指導者に伝わっていたことは事実ですけれども、そうかといってアメリカが非常に強くプレッシャーをかけたり、あるいは無理してでも妥結のために仲介をとろうとか、そういうことはなかったんだと思います。というのは、アメリカはやっぱり、自信がなかったんだと思いますね。韓国の対日感情とかそういうことに対してはそれなりに解ってたし、日本側の事情も解ってましたしですね。アメリカはその中で火中のクリを拾う、そういうことをやるだけの青写真を持ち得なかったんだと思います。

韓国にいるアメリカ大使がその頃東京にいまして、しょっちゅう我々の所へ来て話を聞いてましたよ。けれどもアメリカの圧力というのは、日韓には余りなかったんじゃないかと思います。ただ、ラスクが来た時のようなご指適^{ママ}のような会談ではもちろん話題にもなるし、その時の新聞の一部なんかはそれを非常に大げさに、実際よりもかなり過大に受け取って、これはアメリカのプレッシャーだ、そういう感じは日本に常にありましたからね、報じられていたことは事実だけれど、その報じられた割にはその実態は、そこまで行ってなかったと思いますね。

後宮 池田さんが病氣退陣する直前になるんですが、1964年11月にバンディ²²⁾が日本を經由してソウル

22) マックジョージ・バンディ (McGeorge Bundy)。1961年、ケネディ政権発足で国家安全保障問題担当特別補佐官に就任。1966年に辞任。

へ行って朴一ブラウン、朴一バンディ会談で共同声明を出している。それは日韓交渉の妥結のために、アメリカは適切な方法で指示する用意があると、こういう共同声明の格好になってきますね……。

柳谷 抽象的な原則的なことしか言ってないですね。

後宮 アメリカがその意図でやったのかどうかは知らないが、アメリカは朴正熙大統領と意見があまり合なかったバーガー大使²³⁾を更迭して、ブラウンをおいてこの辺がかなり、アメリカ側の動きも激しくなっているようにうけるんだけど……。一般論的にいうとアメリカのアジア政策からいえばその方がいいわけで、もし日韓間にこぜりあいでも起こったらアメリカはお手あげですから……。そういうことはこの時にかぎらず、終戦後、日本の占領中に才一回の日韓会談（昭26・10・20日）が始まった時も、これは総司令部の斡旋で始まったわけですから。

藤田 ああ、GHQが斡旋したんですか……。

柳谷 その時から、一貫して、なんとか日韓の妥結というのをアメリカが望んでいたことは終始一貫変わりないわけです。さりとて、ずっといろんな過程を見て、アメリカからのつよいアレがあってその結果が妥結になったというのは、当たらないと思います。

後宮 アメリカは火中のクリを拾わなかったという基本的な態度はわかるけど、ほくは今までもはっきりしないのは、3億ドル、2億ドル——金鍾泌さんが大平さんと請求権を決める直前に、韓国はこの辺までおりるといつてきた数字を、1、2度アメリカ側を通じて言って来たわね。初めは80億ドルなんて、いっていた。あれは突拍子もない数字だったとしても請求権のあの数字はあのレベルでネガティブな数字にまでに圧縮してきたのについては相当アメリカが韓国を抑えてたのではないかしら。

柳谷 アメリカからみて韓国は日本と妥結することを望むと、それはアメリカも知っていますから、ことに80億だとか、そんなこと言ってたんじゃだめだよと、あるいは北朝鮮も全部含めて、韓国の治政権

を認めると日本にいったって無理だよということを折にふれて言ってたということがですね。韓国自身が日本と妥結しようという気になった時に、アメリカから聞いてたそういう情報も、相当役に立ったということはありませんわね。

前田 まあそれを全部カバーするような時間の経過において、椎名大臣になられてを含めて、日本と韓国の間には、新聞には報道^マされていないけど、非常に実のあることやっているんですよ。後宮大使のおっしゃられたように、請求権について3、2、1だとかね。その前からすでに1、5と3、5だとかね。そういったものの積み重ねの上で、椎名大臣が来られた時の話にもどるんですけども〔、〕始まってくるわけですよ。もう一度話をもどしますと、椎名訪韓のあと、李東元さんがアメリカに行った帰りに来るわけです。その辺の話がまた一つきわめて大事になってくるわけです。そこでそれに基づいて他の請求権なり、漁業なりというものについてイニシャルも行なわれて、それに基づいて6月の調印ということになるわけですね。まあそれについて、問題は基本条約は椎名訪韓の時にイニシャルされたんですけども、その後は漁業はどうなったか、こっちにしてみるとね、請求権で食い逃げされちゃって、漁業は何も決まらないというようなこと。その辺になると後宮大使、それから柳谷君にいろいろふれて頂きたい問題があるわけですよ。

柳谷 その前に一言、さっきの話の関連をいうと、私は椎名さんとインタビューした記録があるんです。後日ですね²⁴⁾。その記録をいま読みなおしながら感じるのは、椎名さんはね、ご自身のお考えの中では別に佐藤内閣になったからとか、椎名さんが大臣になったから、よし、オレがやるという感じはそう強くなかったんだと思うんです。あのお言葉の中に出

23) サミュエル・バーガー (Samuel David Berger)。1961年6月から1964年7月まで、駐韓米国大使。

24) 以下の文書を指すものと思われる。外務省アジア局北東アジア課内日韓国交正常化交渉史編纂委員会「日韓国交正常化交渉の記録 第II編 交渉担当者の手記・談話 交渉全般(5)日韓交渉の回顧——椎名元外務大臣、後宮大使にきく——(きく人 柳谷課長)」(1969年8月)『日韓会談文書 情報公開アーカイブズ』(<http://www.f8.wx301.smilestart.ne.jp/index.html>) 文書番号1921。

てくるのは、池田内閣が続いていたってやった、ちょうどその時期が来たから自分がやれることはやったんだというような感じを淡々と持っておられたんだと思いますよ。それがいろんな言葉の端ばしに出てくるんです。これはある意味では歴史としても正しいんだと思うんですね。それは今前田さんが言われたように、あの請求権の解決。例の3、2、1方式という、これは池田内閣の大平—金メモで決まったわけです。私はやはりこれが、日韓会談全体の流れを見ると、大変重要な時期だったと思います。その後そのフォローアップで大変ではあったけど、それが大変重要な時期だった、ある意味では日韓会談の大きなヤマ場だったと思うんです。それはまさに池田内閣、大平外相の時なんですね。それから、いくつかあるうちその1つが基本条約ですね。それから漁業関係がある。

そういう流れの中でとらえますとね、やはりそれは椎名さん抽象的ながらご理解になっていて、ずっと流れてきた、そうとういいところまで来ている、ここでもう一息、その基本条約なりそのあとの問題になるんですけど、これは一つハラを決めてやればできるというふうに、自からをとらえられていたのではないかと思いますね。よく「俗説」ですけど、佐藤首相は日韓をやったというようなこと言う人もありますが、これは非常に誤っていると思います。むしろ量的に全体を見れば池田内閣の時に相当な事が行なわれて、いわば最後のアレをつみ取ったとか、刈り取ったのが佐藤内閣だったというふうにとらえる方が歴史的には正しいんじゃないか。椎名さんご自身そう思っておられたんじゃないかと思うんですね。

後宮 それの補足的な意見なんですけど、私は佐藤さんになってから、椎名大臣まで日韓交渉を逐次促進せよとか、そういうようなハツパをかけられた覚え全然ないですね。もう流れにまかせて、出来るもんなら出来るという大臣の姿勢、モットーでしたね。それを非常に感じるのはいま柳谷^マ官方^マ長の言った、いまがチャンスだというふうなチャンスのつかみ方が椎名さんほうまかったと思うのは、漁業交渉で箱根にみんな合宿してやったことがあるんです。ホテ

ルにかんづめでね、ぼくは事務当局は準備の文章も作るのも大変だし、合宿してしまったら、いろんな譲歩もしなくちゃいけなくなるから、そういつて抵抗してたんです。そしたら椎名大臣が留任されたお祝いの会を金東祚大使が赤坂のどこかでやってくれたことがある。その時にね、椎名大臣が「これはもう合宿交渉やるより他しようがない」と言いだされた。ぼくは反対した。そしたら椎名さんがぼくの手をひっぱって金東祚さんと握手させて、そして「合宿交渉やるんだぞ」と言われた。これではもう拒否は出来ない。事実あれで漁業交渉っていうのは出来あがった。

だからあの時がチャンスでしたね。

それからもう一つ椎名さんが無理して急がれなかったというのは、韓国側は、日本が請求権払うかわりに今までのいろんな向こうがいていた80億とか何とか8項目の請求権を全部放棄する^マとう交換公文かそういうものを取り交わすと約束していながら、李東元さんが、5月に来た時だ、出発の間ぎわまで眠りこんじゃって、やってこない。それでぼくは柳谷君なんかとも相談して、食い逃げされたらたまらない。だからもしこれについて話し合いが出来るんでなければもう今日のイニシャルは延期だということを書いておどかすより他しようがないと考え、朝5時頃、椎名大臣の自宅へ電話いれて、「これでやります」っていったんですよ。そしたら普通だったら自分の手柄になるところだから、「無理してでも何とかイニシャルまでせよ」といわれるところだけど、椎名大臣は淡々として「ああいよいよ」といわれるんですね。それでぼくはすぐ韓国へ通告した。そしたら向こうもこれは日本側の腰が強いというんで、イニシャルの時間を30分延ばして、そうして結局請求権放棄に関する交換公文を交わした。ぼくはもう今日はイニシャル出来ないと思って諦^マらめていたら、出来た、っていつてきてくれたんで嬉しかったなあ。

柳谷 だからそのとき、向うの外務省の責任者はもういないんですよ。皆、飛行場へ行っちゃってて。

後宮 東元さんが飛行場をたつんで、音楽隊なんかガンガンやっている時に、向うの随員のアジア局長とパンアメリカン航空の別室で会い、そこでイニシャ

ルした。向こうはひどい野郎だといって、後で怒ったらしいけど……。しかし椎名大臣は、「延ばす」というぼくの意見を淡々と「おういいよ」といって少しも自分のことにこだわられない。そのかわりチャンスと見られたらパッとチャンスをつかまえて、我々にカン詰交渉まで命じられるし、向こうがサボタージュしてるから、ここで少しカツをという時は、パッとそういわれましたね。

前田 たしかにそうですね。

後宮 椎名さんという方は決して世間が言うようないわゆる悪い意味での親韓派じゃなかったですよ、あの方は。そうだそうだ漁業交渉でイニシャルしたやつを、向こうが譲りすぎた、といって本交渉の場でまきかえしてきたことがありますね。

柳谷 それから、前田さんさっき言われた竹島了解、これは非常に大事な小さなヤマというか、日本内部におけるヤマ場でしたな。

前田 椎名大臣ならではのところだな。

柳谷 これはね、要するに請求権に関する大平、金了解。その後の赤城さんが努力された漁業に関する了解は、いづれも原則的な了解だったわけですね。いよいよ条約にまとめあげるとなると、こまかいことまで韓国側とつめなければならぬわけですね。そのためには、まず日本国内を詰めなければならぬ……。が、とくに大蔵省ですね。そこがいやそこはそんな了解にはなっていないとか、ここはこうなおさなけりゃ、こういうふうにかかればOK出来ないとかいうそういうことがいくつか出てきたわけですよ。これはまあ仕方ないことなんですけれども、具体的に言うと3つありましてね。一つは初めは3、2、1と言っていた1ですね。民間信用供与1億ドルというのを韓国側は5億ドルとしてくれと、一と妙なものです。あれは、1億ドル以上の民間信用供与が期待されるという話〔、〕上は青天井だ。向こうはどうしても2ケタ10億もらったと、いわなければ国内がおさまらんと、それで3、2、で5ですから、後民間信用供与5のつまり3、2、5にすれば10億と2ケタ取ったということで、国民の反対をおさえられるというわけですね。急にそんな5と言われてもひどいじゃないかという話で

3ということになった。3、2、3、それが最後の姿なんですけれども。

後宮 5と1と足して2で割ったんですよ。

柳谷 その時に大蔵の方はいやそんな話聞いとらんという。まあ当然ですわね。1億ドル以上とは、いくらでも以上ではないかとあの時言ってたんですけど、これはなかなか事務的にはまとまらなかったわけですね。でこれを3億ドル以上というふうにしなければならぬというのが一つですね。二つめは漁業交渉との関係で、その漁業資金協力をどうするかという問題が出てきて、そこはまあ向こうにいわせれば李承晩ラインをとっぱらうわけにはいかないから、相当打撃を受けるんだから、そのかわり韓国の漁業育成強化するということに合わせてやりたい、そのために零細漁民のための漁業協力資金を下さいよと、その結果が今や北海道沖にまで韓国が出てくるように至ったわけですけど……。それにはやはり低利でなければいかんというお話がありまして、その資金をどうするかというのが、新しい話だったもので詰まらなかったわけですね。これを詰めなければならぬ。金利何%という。それが2番目ですね。3番目は、これは大蔵省が非常に頑張っていた臭なんです。こげつき債務というのがありました。昔の日韓貿易のためのこげつき債権……。向こうは請求権問題が解決するまでは貿易上の債権は払わないと言って凍結していた額が相当あったわけなんです。それを請求権の3億の無償から差し引いて結局まとまったわけですね。それはいいんですが、そのこげつき債権の金利を払え、払わすべきだというのが大蔵省の主張だった。それがかなり長い話ですから180億位たまっていたわけですね。そんな話は今までの交渉では出ていないわけですよ。こげつき債権の利子をどうなんていう話は……。ね。まあそれぞれやっかいな問題だったわけですね。それでなか²⁵⁾ なか事務的にまとまらないで、行ったと

25) 「なか」以下に、頁を改め次の文章があったが、青の見え消し線で見え消されている。「まあ我々から言わせれば、そんなことは払わせないということで差し引くつもりだったのを、大蔵省が言い出した。これを撤回しないということを確認しなければならぬ。まあ各々やっかいな問題だったわけですね。」

ころで、椎名さんに報告して、この点を解決しなければ、その漁業にしても請求権にしても、条文が出来あがらないということで、お話していたところに、今のお話も3月30日の出来ごとなんですけれど。

前田 午後、院内の総務室です。

柳谷 それで結局、いろいろやってたんですけれども、椎名さんが「それじゃ簡単に問題を書いてくれ」といわれる。「これでオレが各大臣、特に大蔵大臣の了承を取るよ」とこう言われて、急遽ここにあるんですけれど、まあこういう文章をまとめたんです。

前田 原案は柳谷君がつくったんですよ。

[不明] ああ、そうですか。

柳谷 いやいや、というよりも本当は「大森誠一」²⁶⁾ 秘書官が最後はやったんですけれどもね。こういうのをこのいろいろ入れる前に簡条書きにしるというわけですよ。こういうこれがコピーですけどね。3億ドル以上が担保される、これが民間信用供与のオ一点ですね。それからオ二点として漁業協力の資金は4000万ドル、金利5パーセントとするということと、それからこげつき債権はとらないと、いろんな経^マいはあるけど、ようするに簡単に書けばこういうことだとおわたししました。椎名さんこれを持って、すぐ佐藤総理、椎名外務、田中〔角栄〕大蔵、赤城農相の4大臣の会合が開かれたわけです。院内大臣室で。私もその隣の部屋にいったわけです。そして4大臣だけで全く他の人がいない所で話し合いがあってですね、終って出てきたら大臣が「これだ」というわけですよ。何かというと、私の差上げた簡条書き、これで話をしたとおっしゃる。各大臣もここまで詳しく知っていたかどうかは別として、そうかと、いいよと言ったというんです。椎名さんに後で聞いたら、田中大蔵大臣がいいよと言ったと〔。〕それじゃこういうことですね。その田中さんが一番大事なのは大蔵大臣で、何かつかまえようと思うと、「わかったわかった」といってね、何も聞かないうちから逃げてしょうがないからね。簡単なものを書かして持って行ってね、で韓国側に見せないような

ふりをして、その紙を出したというんですよ。

前田 韓国側じゃないでしょう。

柳谷 いやいや、そう書いてあるんだ、その記録にね。韓国側にも出さないようなふりをしてね、田中蔵相にその紙を見せたらだ、そしたらこう見てね、直すところは直した。メドというようなところはね。程度をメドとかね。そういうことばが入っているんですよ。椎名さんが入れたか、田中さんが入れたかわからないけど、入れたわけですよ。

後宮 どうも田中さんらしいよ、それは、字のあれからして。

柳谷 それでいいと言ったんで、椎名さんが、それじゃサインしろ、と言ったんで、田中さん、「大蔵」のところにサインしたんです。これとこれと同じ字でしょ。それでねそれじゃ「オレもサインする」って椎名さん「外務」のところにサインして、それから赤城さんがこうサインした。3人サインしてただけだけど、ついでだから総理大臣のもとっちまえて言って、これ又上にね、佐藤総理大臣がされた。これがね。実は大変な重要な文章なんですよ。それでも「とった、とった」といって持って大臣がかえってきた。それはもう後宮局長ももう喜ばれるし、当時の課長が黒田〔瑞夫〕君²⁷⁾ なんだけれども、彼ももうすっかり出来ないと思っていたところが取れた。それで国内的には一山も二山もあれしたんです。さあそれで当時の大蔵省の理財局長の佐竹〔浩〕さんという人がもう怒ってね、総理のところにもどなりこむ、外務大臣のところにも文句言ってくる……。

後宮 そこねちょっともう少し付け加えるとね、隣の部屋で総理室に4大臣がいてね。私はその隣の部屋で総理大臣の応接室にいてね〔、〕隣の部屋で佐竹君と僕とすわってたわけですよ。そしたら椎名さんがこれ持って出てきて、田中大臣も出てきて、「決めたよ」って言って、それで佐竹さんが「どうでした」とこう聞いたらね、「あれはもうこれで全部決めた」とこう言うわけですよ。そしたら佐竹さんが「いやそうはいっても……」どうかこうと

26) 外交官。外務省アジア局次長、公正取引委員会委員などを歴任した。

27) 当時は外務省アジア局北東アジア課長。

か言ったらね。田中さんらしいんだな。「政治的に決めたんだ」というわけですよ。それでも佐竹君は後をおかけてましたからね。それで私はまあ椎名大臣から、この原本頂いてね。それで役所に持って帰ったんです。ただその後もね、大蔵省との折衝も大変でしたよ。向こうから言わせれば何だと〔、〕これでは話は異うと。椎名大臣がそれに対してそれはそう言っても「4閣僚が政治的に決断してサインまでしたものはこれは一つの事実だ」と。それが……。

[不明] それが今のサインのやつですか。これはもう本当に歴史的事実ですね。

[後宮] これがありましたからね、のちこれをもとに、いろんな条文を書いたりして、それでもなおめめましたけれどね。こっちはこれがあるから強いわけですよ。

前田 錦の御旗だもの……。

柳谷 これはやっぱりね、他の大臣では出来ないよね。椎名さんなればこそ出来たというかまあ何といえますかねえ……。

後宮 僕はメモにも書いといたけど、椎名さんならではの腹芸だなあ。

[不明] それは出せないんですか。

[不明] いいでしょう。

[不明] いや、僕は判断つけかねるけど……。

前田 そのメモを大臣はひらひらさせたと、このお墨付、我々はそのことコピーを作ったと、そのお墨付があったため、民間信用供与の手直しについての大蔵事務当局の反対ないし、まきかえしは全くなかった。一切がこれによりあまりに明確に決定されたからであると、ある関係者の記録にあります。そしてこの関係閣議で決定が行なわれた直後、つめかかっていた佐竹局長が田中大蔵大臣に「これでは困ります」と反対したところ、田中大臣が「日韓交渉のような大交渉は、こうしなければまとまらない。しゃあない、しゃあない」と答えたそうである。まさに今ね〔柳谷〕官房長が言われとうりの事が書いてある。椎名大臣と田中大臣の呼吸は実によくあっていたように見えた。こうあの当時の責任者が書いていますがね。

後宮 それから椎名さんが田中さんに呼び止められて「男にしてくれ」。あれね、ぼくの記憶では「男になれよ」と言われたように聞いてただけど……。

話はこう「してくれ」と椎名さんの方から言われたのが3月27日の夜中、それからお宅に電話されたと書いておられます。

初め僕はそう書いたんだけど、誰かほかに居た人から「男になれよ」と言われたんだということを知って……。

柳谷 それもあり得るですね。こうやってまとめれば君は男になれるぞと田中さんに言われた……。

[不明] これはあれなんですね。ずい分椎名さんの証言があるんですね、ここに。

[不明] まあそれがちょっとその部内のあれなんですかね。だから私は持ってきて、今そこの紙はさんであるところは大体カバーしましたよ。大臣の一番さわりのところだけは。まさにこれは門外不出なもので具合悪いんですかね。

岩瀬 竹島の問題はどうなんです。

後宮 竹島の問題はね、要するに最後の段階になって決まらなかったのは、両国間に生ずるすべての紛争は調停にかけるという。その「生ずる」という字を入れることによって「将来生ずる」ということで、今すでにある紛争である竹島はのぞくということに読みたいというのが韓国側の案でした。こちらは本当だったら「現在ある紛争は」と書きたいのだけれど、そこまで言えなくてもばく然と両国間の全ての紛争はということ、今ある紛争である竹島も含むということにしたいというのがこれで、それで両方最後まで、それで最後の一点はそこまで来たんです。いろいろそれまでの竹島という文句を入れるとか、調停のかわりに仲裁にするとか、いろいろあったけど、最後は日本側も折れて、そこまで竹島も除いて全ての紛争ということ、その代わり両国間の全ての紛争ということ、韓国側が言う両国間に将来生ずるといふ、そういう意味の言葉は省くことにした。それで結局向うは朴大統領の直命だからこの問題には触れられないと李東元さん頑張ったんだけど、これはもう調印の日の午前の最後の李東元・椎名会

談でも椎名さんはこの点は絶対降りられないと、で椎名さんはその前にも僕がメモに書いておいたけれどヒルトンホテルに合宿して交渉している我々のところへ来て、どうせ竹島はすぐ帰ってこないんだから、なんとかいい文句をみつけるよう、国会は俺が引き受けたといわれた。その言葉がね。しかし、そうもいかんから事務当局としては今いったくらいに詰めておけど。

前田 早期解決に関する交換公文という形になったわけですよ。

後宮 それを向こうは、「隴を得て蜀を望む」で、さらに「生ずる」という字を入れるということを要求してきたのを、椎名さんがガンとして断られた。向うは午後には調印前に佐藤総理に挨拶に行く、その時にムシ返しますよって、予告していたわけです。しかし、その時ね、ここが金東祚氏の腹芸なんだ、それは「言いますが、これは単にショーです。真剣にムシ返す気運はありません」といった。しかし僕はそれからすぐ総理のところへ行っ「今日午後からこの会談で向こうはこれを持ち出しますよ、だから降りないで下さい」と言っておいたんですよ。で、ところが単にショーぐら [い] と思っていたら、本当にネバリだしてね。そしたら総理も仲々腹芸されるから、もうチャンとブリーフを午前中にしてあるのに、「後宮君、向うはこう言うがどうですかね」なんてね。こちらはそれこそビックリしちゃってね。イヤ、巨頭会談の席上の話しに事務当局が横から口出すことはないから、ともかく午前の会談ではこういうことで、「椎名さんもこういうところまで言うておられます」と言ったら、総理がこれを受けて、「自分としてはこのアレでも、すでに譲り過ぎだと思っている。だからもうこれ以上のことはできません」といったんで、向うも応じた。ところが柳谷官房長の方じゃ政治交渉で将来どうなるかわからんと思ってテキストを両方準備して、韓国側の言うとおりのと、それから日本、本当はそういう事に決まったか、柳谷君に連絡するのを忘れておったら、いよいよ軍楽隊がジャンジャン鳴り出し、[韓国代表が] 帰る時になって、こっちの方に決まったんだって云って、そんなアレがあった。調印の1

時間前に全部のテキスト、印刷が出来上がったネ。あの時は、とにかく法制局の方も馬力かけてくれて、交渉で5、6行できるごとに審議してくれた。こんなことは法制局ではあり得ないことですよ。

柳谷 あのね、一足、ちょっと先に失礼しますんでね、一言、これを見て思い出したんで、ここで私が考えたり、書いたりしたことを思い出したんで、やっぱりね、さっきの話と重複しますけどね。椎名さんの役割ですね。日韓会談における、というのは、まあ色々考えてるとね、たしかにね、あの非常に細かいことについてまでね、詳細ご承知になることもなくですね、任せようとか、良きにはからえという感じのことがしばしばあって、一体その頃の日韓会談ですね、国際政治なり、日本の外交でですね、どんな側面をもっているかということについて、そういう、その公式論といいますか、改まったような議論としては、椎名さんとしてはあまりした記憶はないわけです。むしろ交渉はどんどん動いておりましたからね。で、そういうことから椎名さんは、普通の大臣とか局長がいて、こう大きな交渉方針を決めるとか、どうかという場面は比較的少なかったんですが、しかし、今から振り返ると、それが椎名大臣だったんだと思うんですわ。つまり、あの、全ての問題を承知していて、テキパキ指示される人も、もちろん、一つのスタイルですけどね、そうするとどうしても事務的になっちゃうわけですよ。だから、この時という決断とか、あるいはよしきた、とかいう腹芸とかいうものが出てこない。しかし日韓交渉とは、さっき申し上げたような意味において、普通的外交交渉とはきわめて違う。非常に特異なものだっただけに、全ての外交交渉がそれでいいというわけではないでしょうけれども、この場合については、ああいう椎名さんというものが、たまたま外務大臣でおられたというのは、大変な意味があったと思いますね。例えばさっ [き] から話しが出ているように、要するに、俺が責任をとるから、一つ君たちの最善と思う方法で進めていい、進め給えとかね、こういう話も聞いたこともあるんですが、「私は総理から一さいを任されている。だから、オレがいいと思ったらいいんだ」と。つまり我々からいえば、「総理

の方は大丈夫でしょうか」ということになるが、「オレが総理から任されているんだ。キミたちがいいと思えば、オレがいいと思ったらドンドンやればいい」という言葉とかね。それから、大蔵省がどうだ、という話になると、さっきの例が顕著ですけど「いやあーオレが田中大蔵大臣と話つけるから安心して給え」とかね。

それから逆の例では、後宮大使がまさにいわれたように、「親韓派」といいますかね、もっと譲ってでも早くまとめよう——つまり、「日韓待ち」という言葉が当時は財界の中にもあってですね。日韓がまとまったら聖濟協力がある、一旗上げようと考えた人もいたようですね。だから国内の雑音としては、譲ってでも早くまとめようという者は沢山あったわけです。それが一つのプレッシャーにもなり得るわけでしょう。そういうような時に、椎名大臣は逆に「譲ってならんものは譲らんでいい」と「国内の雑音は気にするな」こう云って下さるわけですね。

こういうことは、あの特殊な交渉を現にやっている者たちからみれば、大変な力強さとか支えになったと思うんです。

しかも非常にタイムリーに、時宜に適して、事務当局では仲々できない決断をされた。あるいは、我々のいうことを「よしッ」という[よう]に認めてくれた、ということが、まさに将に將たる器——という感じをもちましてね。

日韓会談全体からみれば、最後の部分だけに関与されたし、それが長い間の積み上げのうえにあったということも事実ですけど、その時にあの人がいた、ということは、これは大変なことだったというのが、わたしの全体の印象なんです。

後宮 だから本当の聖世家としての外交家だった。外交官でなく、外交家だった——。

前田 すべての外交がそれでいいとは思いませんし、かえってそういうことだと誤まることもありますしよ。うから……ね。

しかし本当にあの時の会談で、椎名さんという人が最後におられたということは、大変なものだったと思いますね。

後宮 椎名さんが外務大臣になられるなんて予想外

のことだった。ご自分でもまったく予想外だった。——というのが就任の時の挨拶でしたし、通産省の松村次官²⁸⁾ なんか心配して電話をかけてまで、秘書官のいいのをつけてくれ、とか何とか気を使っていたからね。

岩瀬 前尾さんの原稿の中にもそう書いてありますね。

[この前後の文章はつながりが悪いが、頁抜けなし]
[不明] 言ったら「ああ読みました、読みましたよ」と言っておられたから。

だからそれはね、後宮大使のあれでね、そのまま載せようと思ったんだ、僕は。それでこれをとってあるんだ。

後宮 まだついこの間のように思うんですがね、僕なんか。あの椎名大臣がこうやってパジャマで電話かけておられたのなんか。

岩瀬 あの頃はしかし酒が強かったですからね。

後宮 ああ、強かったですね。

藤田 わたしはこの前、あの8月16日にちょっと韓国へ行きましたね。丁一権さんと李東元さんに会ったんですよ。あの時にあの今日韓議員連盟の事務総長やっている、金というものがね。彼がね。ずっと日韓交渉の往来のね、あれ全部向こう側のね、記録をいろいろつけてるんです。そしてね、椎名さんが最後に韓国へ行かれたのが77年。77年に椎名さん最後の訪韓をして……。

後宮 日韓親善協会、あの例の時でしょ、大統領夫人暗殺の時の。

藤田 いえ、あの後です。

後宮 あの後ですか [。]

藤田 そしてあの時にね、青瓦台に椎名さんが行かれたんです。そしたらね、その時の光景を彼[金総長]はまあえらい感激しているんですがね、朴大統領が玄関まで迎えてまして、椎名さんが車からおりてきたらね、手をとるようにならね、椎名さんをかかえて、「おかえり」って出てきた時にね [、] 大統領が椎名さんの手をとってね、一緒にあるいて出てきて。

28) 1964年当時、経済企画事務次官だった松村敬一を指すとされる。

それから車の所へまで車のドアはね、大統領が自分であけたそうです。自分であけて椎名さんをだくようにして、中へ入れてドアをしめた。それでその光景を今でも忘れませんということをあの金そうちょうが言ってましてね。朴大統領は本当に椎名さんを尊敬しきってました。そう言っていましたよ。

後宮 そう思いますね。私も間接的に聞いたけど、大統領は椎名さんと佐藤さんを非常にあれしていましたね。

[不明] あの時は、77年はどなたが、椎名さんと一

緒に韓国へみえたんですか。

[不明] 親善協会連合会で・・・・・・・・。

[不明] 金山 [政英] 大使²⁹⁾ が行かれたんです。

[不明] 私も行ってきました。

[不明] それで僕は大臣のあれだもんだから、正直ね、そのせがない僕が言った記憶は

[不明] きょうは本当にいい話をうかがえました。

後宮 思い出話も、本当にいいもので・・・・・・・・。

前田 いや、本当にそうですね。

29) 1968年から4年間、駐韓大使。日韓文化交流協会中央会の会長などを歴任した。

Roundtable Discussion among Diplomats on Treaty on Basic Relations between Japan and Republic of Korea—New Historical Materials from the Shiina Family Documents

Masafumi ASADA

Abstract

This is a record on a roundtable discussion held by Japanese diplomats during the course of honoring Etsusaburo Shiina, the foreign minister who signed the Treaty on Basic Relations between Japan and the Republic of Korea in 1965, looking back on the “Shiina Diplomacy.” This is a new historical document that primarily discusses the role Shiina played in the backdrop of the signing of the treaty.